

朴正熙政権におけるヘゲモニー構築と在日朝鮮人

金, 泰植

<https://doi.org/10.15017/1807133>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（比較社会文化）, 論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 金泰植

論 文 名 : 朴正熙政権におけるヘゲモニー構築と在日朝鮮人

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、朴正熙（パク・チョンフィ）政権におけるヘゲモニーの構築過程において、文化的場としての在日朝鮮人が果たした役割について明らかにすることである。本研究では、反共映画における在日朝鮮人表象、在日学徒義勇軍の英雄化の過程、そして学園スパイ団事件をはじめとした在日朝鮮人政治犯の表象を対象に分析を行い、在日朝鮮人は政権が反共主義と民族主義を節合する上で積極的に動員されたが、同時にヘゲモニーの亀裂をもたらしたという点を明らかにする。

近年の朴正熙研究は、暴力的な手段のみならず文化的イデオロギーが政権の維持のために果たした役割に注目するものが多い。代表的な研究のひとつである林志弦（イム・ジヒョン）の「大衆独裁」論は、「支配」と「抵抗」の関係を互いが排除し合う関係ではなく、包摂し合う複合的なものであると論じ、ファシズムの「大衆民主主義的な側面」（임지현 2002:26）を重要視した。これは、暴力によって朴正熙政権が維持されてきたという従来の研究に対する批判である。しかし、他方で曹喜昞（チョ・フィヨン）は、林志弦の「大衆独裁」論がヘゲモニー構築における強制の役割を軽視したために、独裁政権の責任の所在を曖昧にし、ファシズムを正当化する危険性があると指摘した（조희연 2010）。

文化的イデオロギーと強制と^レそのどちらに重きを置くかという違いこそあれ、両方の手段が朴正熙政権のヘゲモニー構築において必要だったとみなす点で、林と曹の研究は認識を共にしている。本研究は、文化的イデオロギーが強制を可能にするという点に注目しながら、朴正熙のヘゲモニー構築に関する研究の中でほとんど顧みられることのなかった在日朝鮮人に着目する。植民地宗主国であった日本に住む「同胞」としての在日朝鮮人には民族主義的な視線が反映されたし、朝鮮民主主義人民共和国を支持する「共産主義者」在日朝鮮人は、韓国社会にとって憎むべき対象であった。つまり、在日朝鮮人は民族主義と反共主義が交差するイデオロギー構築の上で重要な文化的な場だったのである。

本研究は反共映画の中の在日朝鮮人表象、在日学徒義勇軍の英雄化の過程、そして在日朝鮮人政治犯の表象を取り上げながら、ヘゲモニー理論を参照しつつ、在日朝鮮人という文化的な場を通じて、いかに反共主義と民族主義の節合が試みられたかを考察する。

まず第二章で、在日朝鮮人とは誰か、どのような歴史の文脈の中で誕生し、どのような立場に置かれてきたかについて、「祖国分断」との関係の中で考察する。日本による植民地主義の遺制と朝鮮半島の分断構造の中で、在日朝鮮人の表象を通して民族主義と反共主義を節合する条件が作られたことを明らかにする。

第三章では、韓国映画における在日朝鮮人表象について考察する。1960年代後半から1970年代半ばにかけて、少なくない韓国映画において在日朝鮮人が登場するようになったが、その大半は反共映画であり、基本的には「卑劣な北の手先」である在日朝鮮人を韓国人が倒し、許し、包摂すると

いう内容である。映画における在日朝鮮人の表象を分析することで、反共主義と民族主義が節合されるメカニズムを明らかにする。

第四章では在日学徒義勇軍の英雄化の過程を考察するが、それは分断を決定付けた朝鮮戦争の記憶に関係する。さらにそれは、在日朝鮮人自身が積極的に政権の支配に「同意」した事例でもある。それまで無視された在日学徒義勇軍たちが英雄化される一方、北送阻止隊の存在などは隠蔽されるなど、国家による記憶の選別も行われた。積極的な同意があったとしても、そこには対立も存在し、ヘゲモニーが絶えず安定していたわけではないことを具体的な事例を通して明らかにする。

第五章で考察する在日朝鮮人政治犯は、朴正熙政権のヘゲモニー構築のために暴力的な強制が行使された事例である。在日朝鮮人政治犯の検挙を大々的に報道することにより、学生による民主化運動と朝鮮民主主義人民共和国、そして金大中を結びつけ、朴正熙政権の正当性が主張された。民主化以降、その多くが冤罪であったことが証明されているが、当時もずさんな捜査と取り調べ過程における拷問や暴力の暴露によって、国内外から激しい抗議が起こる結果を招いた。暴力的な強制に対し人々の同意を得ることができず、ヘゲモニーの亀裂が拡大した事例として位置づけることができる。

朴正熙政権のヘゲモニーの構築過程をみると、在日朝鮮人は反共主義と民族主義を節合する上で重要な文化的な場のひとつであったことがわかる。分断国家として成立した韓国がもつ民族主義の矛盾や、反共を唱える自由民主主義国家の建前と実態との乖離が、文化的イデオロギーを不安定なものにした。その一方で、維新体制の成立以降、強制が強まることによってヘゲモニーの亀裂が拡大し、結果として政権崩壊の大きな要因となったのである。